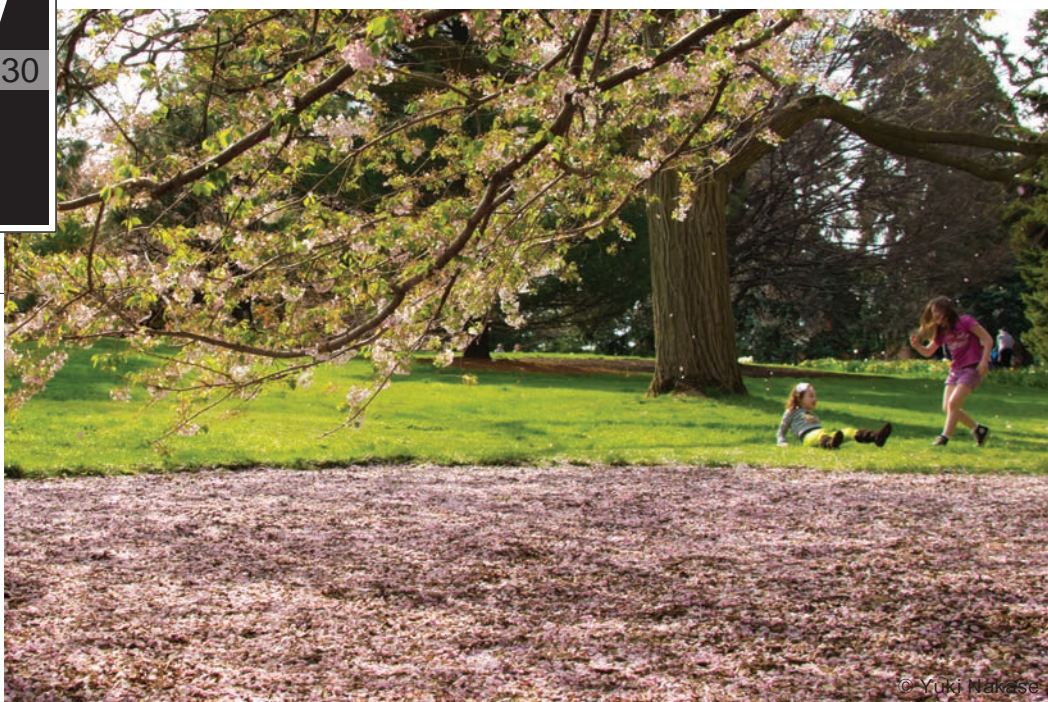




中瀬有紀

卒業



Springtime with *Prunus x yedoensis* Yoshino cherry at New York Botanical Garden

この春、私はニューヨーク大学大学院芸術学部を卒業します。アメリカで舞台とテレビの照明デザイナーを目指すにあたり、大学院進学は多くの選択肢の一つに過ぎません。従って、照明デザイナー志望者全員が大学院に進学する必要は全くありませんが、私にとっては非常に有意義な3年間となりました。理由は大きく3つあります。

一つは、複数の作品を同時にデザインし、どの作品制作においても芸術的に鋭い感覚を保つ方法を身につけたことです。例えば6作品同時に携わるとき、全作品において制作過程の最先端に常に身を置くためには、作品とデザイン案を分析したシーン・プレイクダウンが思案の軸となります。プレイクダウンは新たな情報や発想をその都度書き足していく進行中の文書であり、他の現場から戻って目を通したときにも台本を読んだすぐ後のような情熱や共同制作者と既に話し合った内容を明確に思い出すためのものです。さらに、5ヶ月間休みなしは可能でも睡眠なしは不可能なので、限られた時間の中で複数のプロジェクトに関わるときこそ、タイム・マネージメントと集中力が不可欠です。思想と時間の管理は大学院で学び実践したことの一つです。

もう一つは、ブロードウェイ劇場レベルの図面と資料制作です。ユニオンが大きく影響しているアメリカの舞台照明業界は、ルールブックこそないものの、図面や資料に非常に細かな「暗黙の了解」があります。また、デザインチームと技術チームの仕事分担がはっきりしているアメリカ照明業界の風習が、図面と資料に非常に重きを置く結果を招いています。見やすく、わかりやすいものを提示することが基本ですが、私には手本とそれに近づけるための練習が必要でした。

最後に、大学院で学んだことの中で最大の収穫は、人種や文化を超えた人とのつながりです。6年前に“How are you?” から英語を勉強しなおした私でしたが、デザイン案の発表と舞台作品の批評を英語で繰り返すことにより、私の英語でも観客の心を動かすことが可能になりました。もちろん語学力はかなり上達しましたが、それとともに違いを受け入れるすべを体得していったことを実感しています。英語も「違う人」も怖くなくなりました。この後は、大学院で学んだすべてを使って社会を学ぶ時間です。照明デザインを通して見るアメリカ社会を楽しみにしています。